

『ザ・レジエント・オブ・ドラゴン
スラッシュャーマファイア』

作・澤田金太

○貸し会議室ビル・エントランス(夜)

倉田「あだあああああー！」

エントランスに響き渡るカンフーマスター・倉田(32)の怪鳥音。倉田をナイフで刺そうとした半グレ構成員が倉田の反撃を受け、その手からナイフが落ち、後を追うように床に沈む。倒れた構成員の背後には百数十人ほどの半グレ構成員がおり、呆然と倉田を見つめている。

半グレ構成員の先頭「なんだお前」

倉田、静かに漢服の上着を脱ぎ捨てる。

倉田「ドント・シンク……フィイール！」

倉田、絶叫しながら半グレ構成員の集団に突っ込んでいく。

怯えながら応戦する半グレ構成員たち。だが倉田のカンフーに歯が立たない。不自然に置かれた木製のイスとテーブルのセットやダンボールの山、洗濯棒と洗濯物、木箱に入った三節混などを活用して倉田は半グレ構成員たちを床に沈めていく。

涼子N「世の中には色んな仕事がある」

ロン毛の半グレ構成員の髪を掴んで『ドラゴンへの道』のようにブチッと引き抜く倉田を、カメラが捉える。

涼子N「これも仕事だし」

カメラが青竜刀を手に倉田に襲いかかる半グレ構成員の一人を捉える。

涼子N「これも仕事」

○同・警備室(夜)

半グレ警備員、監視モニターに映るエントランスの乱闘を眺めている。慌てて誰かに電話しようとする、鉈が半グレ警備員の喉を掻き切って、モニターが血に染まる。

その背後にいるのは般若の面を着けた殺人鬼。

涼子N「これだって仕事だ」

○札幌・中心街の風景

T..1ヶ月前・札幌

○オフィスの応接室

会社員の山岸涼子(27)が上司と

一緒に取引先の中年男と話している。

中年男「かわいいいなあ。結婚してるんですか」

涼子「いやしてないです」

中年男「あそうなの？へえ、もったいない

なあ。こんなに可愛いのにね？」

上司「ははは」

中年男「花婿候補、名乗り上げちゃおうかな」

涼子「(無視して)先ほどご覧頂いた資料と

重複するんですがー」

中年男「子供は欲しくないの？これセク

ハラじゃないんだけど、お姉さん子供を

育てるに適した非常に豊かなバストを持つ

てるからさ、これセクハラじゃないんだけ

ど、純粹にもったいないよね」

上司「ははは」

涼子、中年男の頭を両手で掴んで自分

の胸に引き寄せる。

中年男「お？こりゃ、どういう……」

ニヤける中年男に涼子、思い切りの

頭突きを食らわす。

○ハローワーク

担当者と面談している普段着の涼子。

担当者はやる気がなくPCでブラウ

ジングしながら話している

担当者「それもお仕事なんじゃないのお。我慢

して水に流すっていうのもさあ」

涼子「じゃそんな仕事いらねっすわ」

担当者「いらないうたってお仕事しないと生活

できないじゃない。諦めなよ。どこだって

大抵同じだよ」

涼子「はあ、そっすか。どうも」

帰り支度を始める涼子。

担当者、笑いながら、

担当者「取引先に頭突きしてクビってすごい

よなあ。あなたさあ、そういうの好き？」
涼子「はあ？」

○創龍館・外観

SE・銅鑼

中華料理店風の建物の看板に「創龍館」の文字がある。

涼子が訝しげな眼差しで看板を眺め、手にした求人票と何度も見比べている。中から扉が開いて、漢服を着た倉田が出てくる。

倉田「あ、山岸涼子さん？」

○同・店内

客もいなければ店員の姿もないガラソとした店内。

涼子と倉田が円卓で面接している。

倉田が履歴書を読んでいると、涼子、店内を見回しながら、

涼子「料理屋なんすか？」

倉田「いや、単なる装飾ですよ。イメージ的に必要なんで」

涼子「はあ」

倉田「それで、仕事内容の説明なんですけど、基本的には清掃？　かな？　ま実際見てもらうのが一番早いですけど、清掃、発注、セッティング、受付、あとそうだ、負け役とかもやってもらえれば助かるな」

涼子「なんすか負け役って」

入口ドアを叩く音。

男の声「ごめんください」

倉田「あ、ちょっと待っててもらえますか？」

倉田、席を立てて入口に向かう。

倉田「(ドア開けて)ああ、どうもどうも」

男「お久しぶりです」

倉田「ええ、どうもお久しぶりです。お元気でしたか？」

男「はいもう、おかげさまでアタアアア！」

男、突如としてカンフーで倉田に襲いかかる。倉田も応戦してカンフー対決

が始まる。

その光景を無表情に眺めている涼子。円卓に倒れ込んだり花瓶にぶつかって床に落としたり、調理場の調理器具を片っ端から手に取って殴り合ったりして、戦いで店内はめちゃくちゃになっっていく。

最後に倉田が跳び蹴りを放ち、受けた男が窓を割って外に飛び出して決着。

男の声「ありがとうございます！ また来ます！」

倉田「はいはい、お待ちしてまーす」

涼子の下に戻ってくる倉田。

倉田「じゃあ、ちょうどいいんで、片付けてもらえます？」

無表情にしばらく倉田を見つめ、荒れ果てた店内に視線を移す涼子。

○同・店内(一日目)

別の男と倉田が闘って、また室内がめちゃくちゃになっっていく。

隅の席で清掃服を着た涼子がスマホをいじっていると、闘っていた別の男が目の前に吹っ飛んでくる。

涼子N「セミナー運営補佐って聞いたんですけど」

倉田N「セミナーですよ。カンファセミナー。うち個別カウンセリングも取ってますんで」

(以下、カットバック)

○同・店内(一日目・時間経過)

汗だくになりながら掃除機とゴミ袋を手に闘いの後始末をしている涼子。

窓枠から飴ガラスの残りを取り除き、床に落ちた飴ガラス片をホウキとちり取りで集めていく。

× × ×
半分に割れた円卓を引きずって裏庭に持って行く。

○同・裏庭(二日目・夕)

サングラスをかけてガムを噛んでいる
倉田がビーチチェアに寝そべってラジ
オを聴いている。

その一方、涼子は木人椿で稽古中。

長時間やっているようでもうくたくた。

倉田、退屈そうに腕時計を見る。

涼子「これ……こんな訓練……なんか意味
あるんすか」

倉田「ま、すぐにわかるから」

○同・裏庭(三日目)

涼子と倉田のカンフー擬斗。涼子、
劣勢。そして、

倉田「あたたたたたあああああ！」

涼子「ぐわあああ」

倉田の連打を浴びた涼子、気の抜ける
ような声を上げて倒れる。

倉田「違う違う違う、そんなんじゃないでさ、
もっところ、派手に。どーんと。なんのため
に訓練したと思ってるの」

倉田を睨みつける涼子。

涼子「この流れでどーん行かなくないですか」

倉田「いいんだよ。どうせ相手はバカなんだ。

強く見えればそれでいい。あなた誰から

お金もらってますか？ 私からでしょ？

なら私が強く見えた方がお客さんもお金も
集まるんだから、そっちのが私も得だし君
だつて得だろう。はい、じゃもう一回」

×

×

×

倉田と涼子の擬斗。

倉田「あたたたたた！ あちよおおお！」

涼子「ぐわあああ」

倉田の連打を浴びた涼子、ゴロゴロと
倒れる。

ダメだな、という表情を浮かべる倉田。

×

×

×

さきほどと同じ擬斗。

倉田「あたたたたた！ ほあたあああああ！」

倉田の連打を浴びた涼子、自分から

後方に吹っ飛んでゴロゴロと転がる。それから震える手を宙に伸ばし、バタンと手を下ろす。絶命の芝居。

涼子、不機嫌そうに身を起し、

涼子「これでいいんすか」

倉田「いやそれは大袈裟だろ」

○同・店内(四日目)

受付のPCで顧客情報を入力している。

涼子。疲れからうつらうつらと舟を

こいでいる。

と、固定電話が着電。涼子、出る。

涼子「お電話ありがとうございます、創龍館・

倉田カンフーマインドフルネス研究所です」

一方、倉田は尊大な姿勢でイスに座ってICレコーダーに怪鳥音を吹き込んでいる。

涼子「(倉田に)すみません聞こえないので

静かにしてもらえますか」

○同・店内(五日目)

業者が新品の円卓の搬入作業を行っている。涼子が場所を指示していると、

倉田が困惑したような表情で涼子に近づいてくる。

倉田「ちよっと待ってちよっと待って、新品

買えって言ったかな？」

涼子「いや、元に戻せって」

倉田「買わなくていいんだよ。直せるんだから。なんかガムテープとか養生テープとかそういうのがあるだろう。いいんだよテーブルクロスで覆えばわからないんだから」

涼子「すみません」

倉田「ああもったいない。これ幾らしたの？

(業者に)すみません！ あの、これって今からでもキャンセルできますか？」

○同・店内(六日目)

倉田の指示で空のダンボールを大量に壁際に積んでいる涼子。

倉田「もうちょっと積んで。もうちょっと。
壁当たったら痛いから。痛い嫌だから」
涼子「はあ」

○同・店内(七日目)

面接の日に現われた受講生の男と倉田
が再戦中。

今度の倉田は防戦一方、やがて受講生
の男の弱々しい飛び蹴りを受けてダン
ボールの山に倒れ込む。

受講生の男「せ、先生！」

倉田「うああ……や、大丈夫、大丈夫。参った
な、もう私に教えられることはない」

○同・店内(七日目・時間経過)

受講生の男「ありがとうございます！」

一礼し、鼻歌を歌いながら外に出て
行く受講生の男。

倉田「帰った？」

涼子は後片付け中。

涼子「帰りましたけど」

ダンボールに倒れていた倉田、すつく
と立ち上がって奥に戻っていく。

倉田「じゃ引き続き原状復帰お願いしまーす」

涼子「平気なんすか？」

倉田「あんな雑魚に。どこかで負けないとグー
グルでボロカスに叩かれるからな」

涼子「それいいんすか。高い金取って騙した
感じになってないすか」

倉田「ほらカンフーってどう負けるかみたいなの
ところあるから」

軽蔑と憎悪の眼差しで倉田を睨む涼子。
ドアを叩く音。

受講生の男の声「先生すいませーん！」

倉田、慌ててダンボールの山に戻って
倒れたふりをする。

男がドアを開けて入ってくる。

男「なんだったら救急車とかー」

倉田「いや、大丈夫だ。これも修行なんです。
痛みを知りて己を知る。私の師父がよく

言っていたものです。はっはっは」

(カットバック、終わり)

○アパートの外観(夜)

○アパート・涼子の部屋(夜)

涼子、ぐったりとベッドに横になってスマホでインスタグラムの自分の投稿を見る。その写真はカンフー実演で荒らされた創龍館を撮ったもので、「今日もお仕事現場はぐっちゃぐちゃの一文が添えられている。相互フォローのへ恵里菜へのコメントが来ている。」

以下チャット形式のテロップ。

T<へ恵里菜>今日はまた一段と…

T<へ涼子>しがない掃除屋はどんな

現場でもお客様のその後始末をするだけっすわ

T<へ恵里菜>わかります…

T<へ涼子>わかるんすか笑

T<へ恵里菜>わたしも同じような仕事なので…

○沖縄・名護のガソリンスタンド(夜)

T<<名護

一応開けてはいるが誰も客など来ない片田舎のガソリンスタンド。

店員の男が外に座ってイヤホンで沖縄民謡を聴きながらスマホをいじっていると、突然、取り乱した若い女性が現われて店員を驚かせる。

若い女性「た、助けて！」

○ひとけのない道路(夜)

EDMの重低音を垂れ流すミニバンが路肩に停まっている。

若い女性は店員を引っ張ってミニバンに向かう。

店員「お姉さんクスリとかやってないよね？」
若い女性「見てから言えよ！　そして警察を

呼べ！」

ミニバンのバックドアを開ける若い女性。中には誰も居ない。

若い女性「そんな……さつきまで……」

店員「で？ 死体は？ 血の海は？」

店員はため息をついて歩きスマホをしながら、スタンドに戻っていく。

店員「(沖縄方言)これだから本土の連中は」
誰かにぶつかって顔を上げる。

店員「あ、すいません」

ぶつかった相手はひよつとこの面を被った大男の殺人鬼。

殺人鬼は手にしたマチエットを思い切り振り下ろし店員の首をはねる。

飛んだ生首が若い女性に足元に落下。

若い女性、絶叫。一心不乱に夜闇に逃げ出す。

○極楽鳥花畑(夜)

絡みつく花をかき分けて奥へ奥へと逃げる女性。

と、何かにつまづいて転ぶ。見ると、それは車椅子である。

若い女性は束の間怪訝な表を浮かべると、慌てて立ち上がり、再びダッシュ。

と、今度は目の前に若い男の死体を括り付けたカカシが現われる。若い女性が再び絶叫して泣きながら走り出そう

とすると、どこからともなく現われた殺人鬼に喉を掴まれ宙吊りに。

女性はしばらくもがいているが、やがて動かなくなる。殺人鬼はその死体を

壊れたオモチャのように放る。

殺人鬼がカカシに目をやると、その

後ろに隠れていた川上恵里菜(23)が急いで車椅子を持ってきて、若い女性の死体を乗せてどこかへ運んでいく。

Tへ恵里菜へまあ、例えばですけど、

○ひとけのない道路(夜・少し前)

ミニバンの中で男とイチャついている若い女性。

と、モリが男の尻を貫いて下腹部から突き出す。殺人鬼の仕業。

絶叫して逃げ出す若い女性。

車の下に隠れていた恵里菜、それを確認すると急いで外に出てくる。そして茂みに隠しておいた車椅子を素早く持ってくる、男の死体を乗せて再び茂みに隠す。

今度は雑巾とモップと洗淨液を手に持って戻ってきて、猛烈なスピードで車内の血痕を拭き取っていく。

Ｔ：恵里菜、清掃とか

○極楽鳥花畑（夜）

へとへとなりながら男の死体をカカシに括り付けている恵里菜。若い女性の足音が近づいてきて、慌ててカカシの後ろに隠れる。

隠し忘れた車椅子が見える。

恵里菜「しまった！」

Ｔ：恵里菜、セッティングとか

○名護のホームセンターの駐車場（前日）

カカシの材料となる麻縄と竹棒、ロープや、各種清掃用具を買い込んで軽トラックの荷台に積む恵里菜。運転席には殺人鬼の後ろ姿が見える。

○ガソリンスタンドの前（前日）

地図とメモを片手に被害者の逃走ルートを検討している恵里菜。敷地の外でタバコを吸っている店員と目が合って、店員、会釈する。

恵里菜、心なしか申し訳なさそうに会釈を返す。

Ｔ：恵里菜、買い出しとかロケハンとかですね

○極楽鳥畑の前(夜)

中に死体の入った大きな木箱を何箱も軽トラツクの荷台に積んでいる恵里菜。その作業を監視していた殺人鬼が木箱の角をじっと見つめている。

恵里菜、視線に気付いて慌ててその箇所を確認すると、血が滴っている。

恵里菜「ごめんなさい！ すいません！
すぐになんとかします！」

急いで血を拭き取る恵里菜。それから別の箱に中身を入れ替える。中身は見えないがぐしゃぐしゃと音がする。

殺人鬼はそれを見ると軽トラツクの運転席に向かっていく。

恵里菜、ホッとして荷台をブルーシートで覆っていく。

○ミニバンの車内(夜)

運転席に乗り込んで一息つく恵里菜。スマートフォンを取り出して涼子とのチャット画面を開く。

T：「涼子へー、すごいじゃないですか。映画の撮影ですか？」

T：「恵里菜へまあそんな感じです。」

殺人鬼の出てくるホラー映画の撮影と思っていただけば。。。

T：「涼子へいいなあ。羨まし

T：「恵里菜へでもないです。上司が糞パワハラ野郎。辞めたい

T：「涼子へじゃあ、辞めちゃえば？指が止まって返信できない恵里菜。

顔を上げると、殺人鬼の乗った軽トラツクが走り出すのが見える。

恵里菜、スマホを助手席に置いてミニバンを発進させる。

助手席には被害者たちの血にまみれた身分証が置いてある。

○アパート・涼子の部屋(夜)

恵里菜の返事を待ってスマホを見つ

めている涼子。

返事は来ないが、相互フォローの和美から猫の画像が送られてくる。

T：（和美）にゃーん

T：（涼子）今日のネコちゃんはどこ撮り？

T：（和美）池袋だよー

○セミナー会場の控え室

秘書を従えた会社経営者・郷田（58）が満面の笑みを浮かべて倉田と握手している。倉田、引きつった作り笑い。

郷田「いやあ、感激だなあ。先生、さすが、

本物は手の感触からして違いますね！」

倉田「いえいえ、そんな」

郷田「すごいなあ。そうだ、なんだったら技、ちよっとだけ見せてもらえませんか」

倉田「いや、相手がいないと」

郷田「あ、そこのお姉ちゃん、お願い」

座っていた涼子、冷たい目で郷田を見る。

倉田「狭い部屋では危険が伴いますし……」

涼子、わざと音を立ててパイプイスから立ち上がると、イスの背もたれを試割板のように持って倉田の横に立つ。

涼子「できますよ。どうぞ」

面食らう倉田。しびしび涼子に向き直って、構えを取る。

倉田「ほおおおおお……」

そして、

倉田「あた！ あた！ あた！」

イスにギリギリ当たらないように技を繰り出していく。

手を合わせて涼子に礼をする倉田。

キョトンとする郷田。

郷田「あ、終わり？」

倉田「ここはカンフーには狭すぎる。本格的な演武がご覧になりたければぜひ創龍館にいらっしゃってください。この後のセミナーでもその一部をご覧に入れますよ」

郷田「いやいやさすが先生！ もう、存分に若い連中を叩き直してやってください！ 最近の新入社員にはカンフー精神が足りない！ ガツンと！」

○セミナー会場

木人椿や銅鑼で飾られた会場。

倉田が百名ほどの新入社員受講生の間を歩きながら講釈を垂れている。

倉田「かのブルース・リーは詩的にもカンフーを水で喻えた。水は世界で最も柔らかい。しかしその水を一点に集中させれば岩をも砕くことができる。リーが言わんとすることは？ それにぴったりの諺が幸いにも日本語にはある。へ水に流す。リーはその出演作の中で決して先に闘いを挑もうとはしなかった。悪役はあらゆる方法でリーを揺さぶり挑発する。しかし、リーは懸命に自分を抑える。これが水に流すの精神、つまりはカンフー、巷で言われるところのカンフーの極意というわけです」

全員の前に立つ倉田。

倉田「言葉で説明するよりも身体で覚えた方が早い。演武に移ろう。立って」

全員、立ち上がる。

倉田「いいですか、これから私がみなさんを攻撃します。リーのカンフーが敵の攻撃をかかわすことから始まるように、みなさんも攻撃をさけて欲しい。嫌なことをされても水に流す。水のように流れる。自分の身体を水のような流体として意識することがカンフー修行の第一歩であると同時に新入社員としての第一歩です。ま、安心して。私も当てないようには努力します。訴えられたくないですからね」

受講生たち、笑う。

倉田「じゃあ君からどうぞ」

受講生の一人が前に出る。

受講生「お願いします」

倉田、軽く殴るそぶりをして、受講生は倒れるようにかわす。

倉田「いいね。次」

次々と倉田に殴られに行く受講生たち。部屋の隅で呆れたようにそれを眺めていた涼子が会場の後方に視線を移すと郷田ともう一人の男、文科大臣の溝口（67）が、何か雑談しながら満足そうに倉田の攻撃をかわす受講生たちを眺めているのが見える。

殺気立った表情を浮かべる涼子。郷田と溝口、談笑しながら会場を出て行く。

と、ドスンと倒れる音。

受講生の一人、原（22）が倉田の拳を避けようとしてイスに倒れ、腰を強打してしまったようだ。

倉田「大丈夫？」

原「イテテ……すいません……」

倉田「君はまだまだ身体が硬いな。まあ、水に流してください」

原の肩をポンポンと叩く倉田。

拍手する他の受講生たち。

○社用車の中

運転する倉田の横で不機嫌そうにフリーペーパーを読んでいる涼子。

「ペーパーを読んでいる涼子。」

倉田「何がそんなに気に入らない」

涼子「別に気に入らないことないですよ」

倉田「明らかに気に入らない態度だ。それぐ

らい言わなくなったってわかる。私は自己啓発

講師だからね」

涼子「あ、はっきりそれ言うんすね」

倉田「はっきり言って何か問題でも？ ブルー

ス・リーだってクリシユナムルティの影響を

公言しているぞ」

間。

涼子「何が水に流せだよ。ブルース・リーとかよく知らないけど絶対そんなこと言っていないだろ」

倉田「(鼻で笑って)師父に対してそれはないだろ」

涼子「なにが師父やねん」

倉田「師父というのはな、師匠の師に父親の

父と書いて——」

涼子「そこじゃねえよ」

○アパート・涼子の部屋(夜)

あおむけにベッドに倒れ込む涼子。

インスタグラムに木人椿の写真を

アップする。

T::へ涼子「今日の収穫物

すぐさま恵里菜から返信。

T::へ恵里菜「木人椿じゃないですか！

すー

T::へ涼子「すごいのか？」

T::へ恵里菜「ジャッキー・チエンが映画

で使っていました

ミニチュア木人椿と闘う猫の画像を

投下する和美。

T::へ涼子「でもうちの雇い主はジャッ

キーじゃないよ。嫌なことをされ

ても水に流せ。相手に立ち向かわ

ないのがカンフーの極意なんだと。

糞だよ。それって逃げろって

ことですよ、ようするに。

○沖縄・舗装山道(夜)

路肩に軽トラックが停まっている。

その車内にはひよつとこの面をつけた

まま助手席で眠る殺人鬼と、運転席で

スマホをいじっている恵里菜がいる。

○その車内・舗装山道(夜)

涼子の言葉を噛みしめている恵里菜。

T::へ恵里菜「いい教えじゃないですか。

私も全部水に流したいです。

T::へ涼子「じゃウチの道場来れば？」

ぼったくりだけだ笑

間。そして、

Ｔ…恵里菜…それいいかも
Ｔ…涼子…いや、冗談よ？

そおっと殺人鬼の横顔を伺う恵里菜。
仮面の下の表情を伺うことはできない
が、寝ているように見える。

恵里菜、呼吸を整えて、つぶやく。

恵里菜「ホラー映画で殺される奴の特徴。

走って逃げる」

ゆっくりと車の外に出て、歩き出す

恵里菜。

徐々に徐々に軽トラックから遠ざかっ
ていく。

恵里菜「ホラー映画で殺される奴の特徴。

後ろを振り返って前方から注意を逸らす」

極度に緊張して震えてくる恵里菜。

手を握りしめて震えを抑える。

前から一台の車がやってくる。

恵里菜「ホラー映画で殺される奴の特徴。

立ち止まらない」

車道の真ん中に立って、向かってくる

車に親指を立てる恵里菜。

車が停まって、サイドウィンドウから

中年男が顔を出す。

中年男「どうしたの？ こんなところで」

恵里菜「ホラー映画で殺される奴の特徴。

親切な人に助けを求めろ！」

恵里菜、車に駆け寄ると、中年男を

車の外に引きずり出して車を奪う。

○軽トラックの車内(夜)

殺人鬼の姿は消えている。

○創龍館

キャリアバッグを引いて旅行ルックの

涼子の前に腕を組んだ倉田が仁王立ち。

倉田「どういうつもりだ。(腕時計を指し)

2時間13分の遅刻だぞ」

箱に入った自作の怪鳥音CDを涼子に

押しつけようとする倉田。

倉田「会員へのCDの発送業務が遅れてる。

さっさと始めないか」

涼子「どうもこうもねえわ。この格好見てある程度分かれ。ここ辞めます。こんなところろくな仕事ないんで東京行くわ」

倉田「ほお、良い度胸じゃないか。ウチを辞めて君に一体何ができる。ん？ 経歴もない、スキルもない、金だつて大してないだろう。私はそれほど多くの賃金を払っていたわけではないからな。そうか。それが原因か。よし、時給を少し上げよう」

無視して外に出て行く涼子。

倉田「いいんだよ、君の代わりなら幾らでもいるからな。残念だよ。せっかく君のようなクンフーの足りない人間を育てるつもりで拾つてやったのにな。飼い犬に手を噛まれるとはこの事だ。まるでジャッキー・チェンの二重契約だよ」

言い終える前に涼子はドアを閉めてしまう。

○札幌・繁華街

歩きながら徐々に表情が明るくなってくる涼子。

スマホを取り出してインスタグラムでT…へ涼子…糞職場、退職！

T…へ恵里菜…本当ですか？ 私もちょうど辞めたところですよ！

○乗用車のトランクの中

死体のように横たわってスマホをいじっている恵里菜。

と、スマホが圏外になる。

恵里菜、諦めて笑顔で眠りに就く。

○カーフェリーの車両甲板

恵里菜の隠れた乗用車が停まっている。

恵里菜の声「ホラー映画の殺人鬼は、カーフェリーで人を殺したことはない……」

○航行中のカーフェリーの外観

○創龍館

何かを考えながら落ち着き無く室内
を行ったり来たりしている倉田。
木人椿で少し稽古を試みるが、身が
入らず再び行ったり来たり。
と、入口ドアを叩く音。

ドア

に駆け寄る倉田。

倉田「いやあ、先ほどは私も大人げなかった、
やはり——」

涼子だと思ってドアを開けた倉田
だったが、そこに居たのは郷田と
秘書、弁護士や数人のスーツの男。

○同(時間経過)

円卓で倉田と郷田たちが話している。

倉田「集団訴訟!？」

郷田「先生、みっともない声を出さないで
くださいよ」

倉田「ちよつと待って下さい！ 私が何を
したって言うんです!」

郷田「小野くん、君、見たんだよな？」

小野と呼ばれた男「はい、同期の原くんが
倉田さんの暴行を受けて腰を怪我をしま
した。私も強制的に倉田さんの演武相手を
させられて……」

肘に出来た小さな打撲傷を見せる

小野。

倉田「そんな！ それはおかしい！ 強制的
にも何も空振りですよ……あ、あなただっ
てガツンとやっちゃってくれと言ったじゃな
いですか!」

素知らぬ顔の郷田。

倉田「大体、あのセミナーはあなた名義の
メールで頂いた注文通りのもので——」
郷田「原くんは会社をパワハラで訴えると
言っている。先生、私はね、可哀想ですよ。

彼は先生を信じて、弱い自分を克服するためにカンフォーセミナーに参加して、その結果、身体にも心にも酷い傷を負ってしまった。私にとって新入社員は子供のようなものです。その子供を傷つけられたら親としちゃあ黙っていられないでしょう」

倉田「ちよつと待って下さいよ……つまり、つまりですよ……その原くんという新入社員は私のセミナーに無理矢理参加させたあなた方を——」

弁護士「参加は任意でした」

倉田「いやでも、それでパワハラがどうのって話なら私は関係ないじゃないですか！」

郷田「子供の間違いを正すのも親の役目です」
弁護士「事実確認なんですが、これは、あなたがセミナーで売ったもの？」

怪鳥音CDをテーブルに置く弁護士。

郷田「小野くん、君、これを無理矢理買わされたんだよな？」

小野と呼ばれた男「はい、買わなければまた暴力を振るわれるのではないかと恐ろしく、とても断れる空気ではありませんでした」

倉田「ウソだあああ！」

郷田「先生、少し落ち着いたらどうです」

倉田「と、とにかく私は暴力なんぞ振るってませんよ！ その原くんだかなんだかが

私を刑事告訴していないのがその証拠じゃないですか！ CDだって無理矢理買わせたりもありません！ あなた方が買うように推奨してたんじゃないですか！？」
弁護士「示談の意思はないのですね？」

郷田「残念ですねえ、先生」

倉田、人を殺めた時のブルース・リーの
ような表情を浮かべる。

○東京・渋谷の風景(夕)

○半グレのオフィス・コールセンター(夕)

沖縄で殺人鬼が殺した人々の身分証が
デスクの上に置かれている。データ

入力担当の半グレ社員がその個人情報
をPCに入力中。
フロアの別の部署では振り込め詐欺の
芝居担当の半グレたちが数人でチーム
を組んで詐欺電話をかけている。

○同・副店長室(夕)

半グレ組織・東京本店副店長の荒川
和美(30)がPCで経済ニュースサイ
トを見ている。そこには官民一体の
新事業立ち上げパーティの記事が載っ
ており、溝口大臣と郷田、半グレ会長・
桑原(35)が並んで写る写真が添えら
れている。

スマホの着信バイブ。

和美がスマホを開こうとしたところで
ドアのノック音。

和美、スマホを置いて、

和美「どうぞ」

和美の側近・狩野(24)が入ってくる。

狩野「失礼します」

傍らにやってきてPCを覗き込む。

狩野「お、もう出てますね」

和美「あれだけお膳立てしたんだから、そりゃ
出してもらわなきゃ困るよ」

狩野「会長も財界人っすね」

和美「会長だけね。え、どうしたの？」

狩野「ああ、いえ大したことじゃないんです
が、ロールの外注業者と一人連絡が取れ
なくなりまして、在庫はまだ余裕があるん
ですが、今から調達に動いた方がいいか
どうか、ちよっとお聞きしたくて」

和美「ロール業者ねえ。別にいいんじゃない？
事業方針もいつ変わるかわからないし、
会長の大事な時期に足出すわけにはいか
ないし」

狩野「ですよね」

和美、ため息。

狩野「なんかあったんすか？」

和美「セミナー行きたくないな」

狩野「ああ」

狩野、笑う。

○アパート・廊下(夜)

涼子の部屋のチャイムを何度も押す
倉田。何度押しても出ないのでしびれ
を切らしてすごい速さで連打する。
しかし涼子は出ない。

諦めてアパートから出て行く倉田。
路駐した社用車に戻りながらスマホで
涼子に電話する。留守電。

倉田「山岸くん、大変なことになった。どうか
君の力を貸して欲しい。畏なんだ。ハメられ
たよ。先日のセミナーでー」

録音が終わる音。
運転席に座ってもう一度かけ直す倉田。
留守電。

倉田「録音時間が短すぎるだろ！」

と、助手席に置かれたフリーペーパー
が倉田の目に留まる。

○名古屋・喫茶店(朝)

スポーツ新聞を読みながらタバコを
吸っている店主。

テレビでは朝のワイドショーがやって
いて、溝口大臣が汚職疑惑についての
記者のぶら下がりのにらりくらりと
答えている。

記者「金銭の授受はあったんですか？」
溝口大臣「それは、具体的に、どういった意味
なの？ 具体的に言ってくれないと答えた
くても答えられない」

誰かが店に入ってくる音。

店主「いらっしゃい」

顔を上げずに適当に言う店主。その目
の前のカウンタ―に、長時間の密航で
ゾンビのようになった恵里菜が、倒れ
込むように座る。

恵里菜「モ、モーニングをください……」

恐怖に固まる店主。

T…名古屋

○名古屋城

すっかり元気を取り戻した恵里菜、スマホで城の写真を撮ると、インスタグラムのDMにアップし涼子に見せる。

T…恵里菜…名古屋城！

続けて味噌カツの画像をアップ。

T…恵里菜…味噌カツ！

そして名古屋名物・喫茶マウンテンの抹茶スパゲティの画像をアップ。

T…恵里菜…マウンテンの抹茶スパ！

○クラブ(夜)

隅の方で酒を飲みながらスマホをいじっている恵里菜。泥酔して上機嫌に笑っている。

T…涼子…うん名古屋ですなあ。

ならばこっちは…

涼子、十和田湖の画像をアップ。

T…涼子…十和田湖！

続けて恐山の画像をアップ。

T…涼子…恐山！

そして悩ましいポーズを取っているように見える二股大根の画像をアップ。

T…無人直売所で買ったエロい大根！

T…恵里菜…おお！ いかにも青も…

いやそれ青森名物なのかッ!?

路上で撮った猫の画像をアップする和美。

T…和美…鶯谷のねこ

と、いかにもチャラそうな男が声をかけてくる。

チャラ男1「目悪くなるよ。暗いところで

スマホ見ると」

恵里菜「は〜い」

チャラ男1「誰か待ってるの?」

恵里菜「うるせえ。お前殺しちゃうぞ、こっちは何十人も死体処理してきてんだからな」

ニヤニヤしながらチャラ男1の頬を

はたく恵里菜。

チャラ男1「え、なに、こわ」

チャラ男に背を向けて去ろうとする

恵里菜、視線の先に何かを認めて

固まる。

遠くの暗がりには若女の能面を被った

殺人鬼が立っているように見える。

慌てて逃げようとした恵里菜、足が

もつれて派手に転ぶ。

ああむけに倒れて意識が薄らいでいく

恵里菜。その顔を覗き込むチャラ男1。

チャラ男1「大丈夫？ おゝい」

恵里菜、意識を失う。

○ハイエースの車内(夜)

後部座席で目を覚ます恵里菜。両手が

結束バンドで縛られている事に気付く。

運転席のチャラ男1と助手席のチャラ

男2が何か話している。

チャラ男1「アキラさんも本店の方から相当

つつかれてるから」

チャラ男2「そんなの本店だってピン10タレ

10が現実的な数字じゃないって分かって

るんだよ。分かってあえてやらせてんだよ」

チャラ男1「努力目標的な？」

チャラ男2「そりゃそうでしょ。何本取れるか

知らねえけどそりゃ一本でも多く取れた方

がいいわな。本部としてはそれで利益が

出るし、結局目標通ってねえじゃねえかって

叩く理由も出来るんだよ。それが本店の

やり方」

ゆっくり身を起そうとする恵里菜に

チャラ男1が気付く。黙る二人。

恵里菜「どこに向かっているの……？」

チャラ男1「ああ、もうすぐ着くから」

恵里菜「どこ？」

チャラ男1「寝てていいよ。安心して」

恵里菜「逃げた方がいいよ……殺される」

チャラ男2、ニヤけて恵里菜を見る。

チャラ男2「殺されるの？ あそう。え、

誰に？」

恵里菜「降ろして……死ぬよ」

チャラ男2、笑って前に向き直る。

○レンタルコンテナ場(夜)

ハイエースが入口で停まると、タバコを吸いながらスマホを見ていたヤンキー男が特殊警棒片手に運転席に近づいてくる。

サイドウィンドウを下げるチャラ男1。

ヤンキー男「お疲れっす。ピンすか？」

チャラ男1「タレ。あれ空きあったっけ」

ヤンキー男「あー……作りましようか？」

チャラ男1「あいいいよ。どうせすぐ出るから。

集計連絡だけしといて」

ヤンキー男「うっす」

車から離れていくヤンキー男。ハイエ

ースはコンテナ場に進入していく。

一つのコンテナの前で停まるとチャラ男2が降りて、コンテナの鍵を開ける。

ハイエースの後部座席からコンテナの様子が見える。チャラ男2が扉を開けて、その中に女子高生が監禁されているのが恵里菜の目に入る。

チャラ男1、タバコに火を点ける。

チャラ男1「タバコ、吸っていい？ 最近どこも吸えなくてさ」

コンテナ場の入口ではヤンキー男が

相変わらずスマホをいじっている。

その前にいつの間にか男が立っている。ヤンキー男が顔を上げると、その男・

殺人鬼は今若女の能面を着けていて、鉈でヤンキー男の首を切り裂く。吹き出す血が白い能面を真っ赤に染める。入口で起きている惨劇には気付かずにチャラ男2、片手でナイフを弄びながら恵里菜をハイエースから引き出し、女子高生のコンテナに引っ張っていく。

チャラ男2「叫ぶぐらいすれば？ ここからじゃ誰にも届かないけど」

恵里菜「ナイフなんて使わない。商品が傷物になるから。でも私たちは違う」

バカにした表情で恵里菜を見るチャラ男2。怯えた目でチャラ男2を見ている女子高生。

恵里菜「彼女レイプした？」

チャラ男2「(ニヤけて)なんで」

恵里菜「ホラー映画の殺人鬼は処女は殺せない。(女子高生に)ごめん」

チャラ男1、その様子を眺めながらサイドウィンドウを下げてタバコの灰を外に落とす。と、その手首を殺人鬼が切り落とす。

絶叫するチャラ男1。一斉に振り返る一同。

チャラ男1は残った腕で慌ててアイドリング中の車を動かそうとするが、その首を殺人鬼は素早く突いて、チャラ男1は絶命。ハイエースは女子高生のコンテナに突っ込む。

咄嗟に逃げ出す恵里菜。ハイエースとコンテナの間で押しつぶされるチャラ男2。

去りゆく恵里菜を眺める殺人鬼。

女子高生が震える足で立ち上がって

殺人鬼に近づいていく。

女子高生「助けて……助けて……」

殺人鬼、女子高生の胸を鉋で貫く。

そのまま女子高生を押し去って、ハイエースとコンテナの間からずると逃げだそうとしているチャラ男2の腹を串刺しにする。

○ネットカフェ・個室(朝)

眠っていた涼子、勢いよく寝返りを

打って壁に頭をぶつける。

涼子「イタッ!」

目を覚ましてスマホを手取る。ロック画面に表示されている時間は朝8時。インスタグラムを立ち上げて恵里菜

から返信が来ていないか確認するが、チャットは昨日で停まっている。
T：仙台

○松島

橋から島のスマホ写真を撮る涼子。早速インスタグラムのDMにアップして、

T：涼子へ松島！

しかし画面を眺めていても恵里菜の反応はない。

T：和美へどーした？

T：和美へ喧嘩などした？

T：涼子へ（疑問の顔文字）

○牛タン屋

牛タンと食べながら和美とDMのやりとりをしている涼子。

T：和美へあなたは東京来る予定？

T：涼子へ明日には着くはず。実は

宿探してんすよね旦那。へっへっへ

困り顔の猫の画像を投下する和美。

○瑞鳳殿

スマホで写真を撮りながら敷地内を見て回る涼子。一通り巡って、最後に本殿の境内へ。

本殿をスマホで撮ると、その画像をインスタグラムにアップする。

振り返る涼子。すると2メートルほど先に倉田が仁王立ちしている。

涼子「なんで」

倉田、チッチッチという風に指を振りながらしたり顔で近づいてくる。

倉田「インスタグラムに旅行写真。パンくずを置いておくようなものだな」

以前涼子を読んでいたフリーペーパーを涼子に見せる倉田。その表紙には

へ特集 東北一人旅のススメとある。

涼子「いやこっちが言ってるのはなんで来るん

だよってことだから」

倉田「留守電を聞いていないのか」

涼子「聞かねえよなんで聞くんだよ」

倉田「聞けよ」

涼子「テメエの知ったこつちゃねえだろだから要件はなんだよ」

倉田、少し考え込んで、スマホを涼子に渡す。

そこには倉田の巻き込まれたパワハラ訴訟のニュース記事が表示されている。

倉田「訴えられてしまう」

涼子「ああ、いいじゃん」

倉田「もし私に非があればそうだろう。しかし完全なる冤罪だ。正確にはスケープゴートだろうな。悪いのは私で会社側には咎がないことを株主とメディアに示したいのだろう。やられたよ。大企業は利益の最大化にしか関心がない。利益にならない者は切り捨てだ」

涼子「その大企業の従順なる奴隷を育てる手助けをしたのはテメエだろ。因果応報、自業自得だ」

立ち去ろうとする涼子の行く手を遮る倉田。

倉田「待て！ 君には私の証人になってもらわないと困る。私のセミナーで暴力沙汰も強制的な商品購入もなかったことをその場にいた君なら証言できるはずだ」

涼子「そんな情けないへ待て〜があっつていいのか」

倉田「良いか悪いかは私が判断することだ。どうしてもここを通りたいのなら……」

カンファの構えを取る倉田。
倉田「私を倒してからにするんだな」

二人の間に流れるただならぬ雰囲気
ギョラリィが出来てくる。

沈黙。緊張した時間がしばらく続き、
やがて、涼子、スマホで電話を掛けようとする。

倉田「どうした」

涼子「警察に」

瞬時に涼子の足元にすがりつく倉田。

倉田「それだけは！ それをされたらたとえ無実でもイメージが！ 裁判官の心証を悪くする！ 破産してしまおう！」

涼子「セクハラ。迷惑防止条例違反。準強制わいせつ」

再び瞬時に涼子の足から手を離し

土下座する倉田。

ギャラリィが二人の写真をスマホで

撮りまくっている。

倉田「はいすいませんでしたごめんなさい！」

涼子「こっちが犯罪者みたいだから立て」

○レンタルコンテナ場

半グレグループ名古屋支店長のアキラが和美と狩野の前で土下座している。

その周囲には半グレの構成員たちが

数十人ほどおり、既に回収の終わった

死体の痕跡を消す作業に入っている。

和美「そういうのいいですから」

アキラ「すいませんでした！ すいませんでした！ すいませんでした！」

狩野「本店の副店長がiiiiって言ってるんだよ」

アキラ「すいませんでした！ すいませんでした！」

狩野「

狩野、アキラの顔面を蹴り上げて何度も何度も激しく蹴りつける。

狩野「

狩野「本店の副店長がiiiiって言ってるんだよ」

和美、レンタルコンテナの現場責任者に話を聞く。

和美「タレピンは？」

現場責任者「一人死にしましたが他は全員無事でした」

和美「同業者なら持つてくしなあ。怨恨かな？

なんか心当たりとかないの？」

現場責任者、首をかしげてタブレット

で和美に監視カメラの映像を見せる。

現場責任者、首をかしげてタブレット

で和美に監視カメラの映像を見せる。

現場責任者、首をかしげてタブレット

で和美に監視カメラの映像を見せる。

現場担当「犯行の様子は克明なんです、マスク被ってるみたいでして。変質者の可能性も考えてはいるんですが」

画面の中の逃げていく恵里菜を見つめる和美。

和美「ふうん」

狩野が血だらけの手をタオルで拭きながら戻ってくる。

狩野「兵隊出しますか」

和美「いや、騒ぎにするのはよそう。会長が大事な時だしさ」

狩野「あ、ご祝儀にタレ手配しときましようか。ミソなしマクあり。相手の代議士先生そういうの好きでしょ」

和美「そうだねえ」

うんざりしたような表情を浮かべる和美。

狩野「なあアキラ先輩！ ミソなしマクありのタレって用意できますか」

アキラ「はい！ すぐにでも！ はい！」

狩野「いいやつだよ。最高級」

アキラ「はい！ わかりました！」

俯き加減で車に向かっていく和美。

と、猫の鳴き声が聞こえて、和美は足を止める。鳴き声はコンテナからだ。

和美「ねえちよっと」

和美が呼びかけると現場責任者がやってくる。

現場責任者「はい」

和美「ここ開けてくれない？」

現場責任者「あ、はい」

コンテナの鍵を開ける現場責任者。

中には狭いケージに詰め込まれて糞だらけになったガリガリの子猫達がいる。しばらくその光景に釘付けになる和美。

和美「これ初めて見たな」

躊躇う現場責任者。

現場責任者「あのー、本来ならそちらに注力すべきだと私の方からも提言はしたんですが、どうしてもタレピンのノルマ達成が難

しくなりまして、勿論、代わりにならないことはアキラさんも分かってはいるんですが、まあ、動物虐待といえますか、その手のマニア需要もありますし、えー、その、本店に献上できないかと、そういった指示がアキラさんからありまして」

和美「ふうん、そっか」

現場責任者「(小声)私は反対でした」

和美、黙ってアキラに近づいていく。

アキラ「カズヨシさん、俺は――」

言い終わらないうちに和美はアキラに激しい暴行を加え始める。

○静岡の国道(夕)

角張った縁石で結束バンドを切っている恵里菜。

ようやく切れると、疲れて倒れる。

そのまま空を眺める。

どこからともなく聞こえてくる焚き火の音。夕日の橙はいつの間にか焚き火の色に変わっていく。

恵里菜「ホラー映画の殺され役の女優は、殺された男の血を浴びると悲鳴を上げる」

○(回想)山奥のキャンプ場(夜)

上の空で焚き火を眺めている恵里菜。

若い男三人と若い女一人、それから

もう一人の若い女が焚き火を囲んで

いる。恵里菜とは対照的に他の四人は

酒が入っていて楽しそう。

若い男A「エリちゃんは？」

恵里菜「はい？」

若い男A「なんか、怖い話とかかないの」

若い女「あ、恵里菜の怖い話聞きたいなー。

恵里菜ホラー映画とか好きだもんね」

若い男B「へー」

恵里菜「あー……あ、すいませんちょっとタバ

コ吸ってきていいですか？」

若い女「吸ってたの？」

恵里菜「実は隠れて」

若い男B「へー」

ぎこちない笑みを浮かべて森の奥に消えていく恵里菜。

その後ろ姿を眺める若い男AとB。

若い女と若い男Cは二人で良いムードになっている。

○(回想)キャンプ場の森の中

恵里菜、一人になったところで立ち

止まってスマートフォンを開くが、

圏外。恵里菜、溜め息。

若い男A「わっ!」

若い男A、背後から恵里菜の肩を掴んで脅かす。

恵里菜、驚いてスマホを落すが、一言も発さずに若い男Aを見る。

若い男A「びっくりした?」

恵里菜「なんですか」

若い男A、タバコをくわえて火をつける。ライターを恵里菜に差し出して、

若い男A「火、ないんじゃないかと思って」

恵里菜「ああいや、結構です」

若い男A「浮かないね。楽しくない?」

恵里菜「いや、そんな……」

若い男A「ま気持ちは分かるよ。俺も最初は

慣れなかったもん。慣れだよ、慣れ」

恵里菜「はあ、そうですね……」

森の中から若い男Bが現われる。

恵里菜、それを見て表情に緊張が走る。

若い男A「あれ、どうしたの」

若い男B「なんか、あっちの二人イイ感じに

なっちゃったから、二人にしといてやろうと

思ってる」

若い男A「えー、じゃしばらく戻れないな。

吸う?」

若い男B「吸わないよ。禁煙。知ってるじゃん」

ん」

若い男A、笑う。若い男B、恵里菜見て、

若い男B「なんか、暗いっすね」

若い男A「慣れないんだって」

若い男B「へー」

恵里菜「じゃあ、私そろそろ……」

焚き火の方に戻ろうとする恵里菜。

その腕を若い男Aが掴む。

若い男A「まあまあまあまあ、もうちよつと

いようよ。向こうの二人に悪いから」

若い男B「そつすよ。今良い雰囲気なんで」

恵里菜「いや、でも」

若い男A、恵里菜の肩を撫でる。

若い男A「そうだよ、今良い雰囲気だから」

恵里菜、咄嗟に走り出そうとするが、

若い男AとBに掴まれて逃げられない。

若い男A、恵里菜を押し倒して口を

手で塞ぐ。

若い男A「大丈夫だよ、慣れだから」

もがく恵里菜を若い男Bが押さえる。

焚き火の方から微かに悲鳴のような

ものが聞こえる

若い男B「なんか聞こえなかった？」

若い男A「向こうも盛り上がってるんじゃない

の」

恵里菜を犯そうとする二人。

と、若い男Bが急に立ち上がって奇妙

なステップを踏む。

若い男Aはレイプに夢中で見もしない

が、恵里菜は若い男Bの首をボウガン

の矢が貫いているのを見る。

どこからかチエーンソーの駆動音。

それが段々と近づいてくる。

若い男B、倒れて動かなくなる。

その音に気付いて若い男Aが若い男B

の死体に目をやった瞬間、チエーンソ

ーの刃が若い男Aの腹を背後から貫く。

その血を顔面に浴びる恵里菜。

驚くが、恵里菜は叫ばない。

○静岡の国道(夕)

倒れた恵里菜の顔を覗き込むヘルメッ

トを被ったおばさんの顔。

おばさん「お姉ちゃんどうしたの？ 平気？」

恵里菜、泣き出しそうになりながら、同時に笑い出しそうにもなる。怪訝な表情のおばさん。

恵里菜「ホラー映画では逃げる女を助ける善人が殺される」

恵里菜、急に立ち上がるとおばさんを押しつけ、彼女が乗ってきた原チャリを奪って走り出す。

男「ああ！ ちょっと！ ねえ！」

恵里菜は声を無視して走り続ける。

○新幹線車内(夜)

東京行き列車。

倉田と涼子が座っている。二人の間には険悪な空気が漂っている。

倉田「とにかく、人助けだと思って」

涼子「お前が人を助けたことがあるのか」

倉田「君は知らんだ。私からカンフーを学んでどれだけの人間が救われたか。いいのか？ 人助けが好きなのだが、私が店を畳めば私のカンフーに救いを求める人間まで見捨てることになるんだぞ？」

涼子「騙されるかボケ」

倉田、創龍館・倉田カンフーマインドフルネス研究所のパンフレットを涼子に見せようとする。

倉田「パンフレットの受講体験談にもちゃんと喜びの書いているじゃないか。ほら。みんな喜んでるぞ」

涼子「アホらしい」

諦めてパンフレットをしまう倉田。

倉田「何がそんなに気に食わない。二度目だよ。これを聞くのは」

涼子「大した実力もないくせに偉そうな奴が嫌いなんで」

倉田「実力ならある。発揮できる機会がないだけでね」

涼子、ちっとも面白くなさそうに鼻で笑う。

倉田「ブルース・リーだって武術大会での実績

はない。彼の名を知らしめたロングビーチ国際空手選手権大会は演武だったからな。だが、だからと言ってブルース・リーに実力がないことにはならないだろう」

涼子「お前話は上手いな。ブルース・リーも話が上手かったんだらうな」

倉田「上手かったさ。だから彼は自分売り込めた。無敵のカンフーマスターのイメージと一緒に。考えてもみろ。中世じゃあるまいし武術の達人がそれだけで飯を食っていけると思うのか。カンフーマスターがカンフーマスターでいるためには金が必要なんだ。そのためには自分を売り込む必要もある。時には……気に食わない連中の顔色を伺う必要だってあるんだ」

車窓から夜の町を眺めている涼子。

雨が降り出して、窓をポツポツと雨粒が流れていく。

涼子のスマホがバイブ通知。見てみると、恵里菜からDMの返信が来ている。

〈恵里菜〉既読スルースマソ！ もう

すぐ渋谷着きます！

○半グレのオフィス・店長室(夜)

半グレ組織の本店店長・榊(31)に顔を殴られる和美。

榊「立て」

和美が立ち上がると、榊は再び和美の顔を殴りつける。

榊「ほら、立てよカズヨシ」

震えながらなんとか立ち上がろうとする和美。

その光景を無表情に眺めている狩野。デスクの上にはモニターが置かれており、別のオフィスにいる会長・桑原がPCで別の作業をしながら横目で和美たちを眺めている。

榊「大丈夫か。足、貸そうか？」

和美「足？」

榊、四つん這いになっている和美の

腹を思いきり蹴り上げる。

仰向けに倒れる和美。

榊「なあ和美よ、これ誰の責任だ。これだけ舐められて。お前会長の顔に泥塗ったぞ」

モニター越しの会長・桑原、チラリと

二人を見る。

和美「私です」

榊「私だよな。私だったら普通お前、責任果たそうとするだろ。社員三人も殺られて、

タレ一本死んで。逃げた方のタレ警察にぶちまけるぞ。それを兵隊も出さないでお前」

和美「騒ぎにしたらかえって会長に迷惑がかかるかなあって」

和美に脇腹を踏みつける榊。呻く和美。榊「会長のせいにしてんじゃねえよ。お前

だろ？ お前が自分の判断でやったことだ。会長なーんにも命令してないよ。会長は

俺たちを信じてくれてる。親みたいなものじゃねえか。お前、親の信頼を踏みにじったんだよ」

和美「すいません」

和美から足を離してデスクチェアに座る榊。

榊「狩野」

狩野「はい」

榊「お前明日から、和美の代わりに副店長やれ。お前のが誠意あるわ。ロール業者の

件だってお前、お前の報告がなかったら上がってなかったもんな。隠蔽だよ。隠蔽。

情報共有は仕事の基礎だろお前。なあ」
光のない眼差しで狩野を見つめる和美。

和美の視線を無視する狩野。

榊「和美は名古屋支店行け。な。お前の責任で支店長解任したんだから。自分でケツ拭かないとな」

和美、咳き込みながら、脇腹を押えて立ち上がり、榊と会長に一礼して部屋を出て行く。

誰も和美に目もくれない。

桑原がモニター越しに話し出す。

桑原「警察には？」

榊「はい、その点は問題ありません。既に事故のあった倉庫の在庫は移動済みです。例の男とタレは捜索中ですが――」

桑原「違うよ。誰を切るかって話。さっきの彼、出しちゃうの」

榊「そうですねえ、名古屋支店長として、やはり責任は取ってもらおう形になるかと、はい」
桑原「勿体ない。あなたより有能だよ」

榊「そんなまた、会長」

榊は笑うが会長は笑わない。

○同・廊下(夜)

店長室のドアにもたれかかって放心状態の和美。

しばらくそうしているが、やがてスマホを取り出すと、その画面を見る。

○賑やかな渋谷の街景(夜・雨)

T::渋谷

○渋谷・ハチ公前(夜・雨)

ビルのひさしの下に立っている涼子と倉田。倉田はジャージにサンングラス姿で腕組みをして仁王立ち。

涼子「お前はいつまでいるんだ」

倉田「裁判に協力すると言え。私には君と違ってオフ会で遊んでいる時間などないんだ」

遠くからチラチラと二人を眺めている

恵里菜。

涼子もその視線に気付く。

恵里菜、おそるおそる二人に近づいてくる。

恵里菜「あのう……」

涼子「恵里菜さん!？」

恵里菜「あ、そうですそうです! じゃ、涼子さん!」

涼子「どうもはじめまして」

恵里菜「うわあ! 本当だ、やばい人ですね」
倉田を見て笑う恵里菜。

倉田「何がだ」

涼子「やばい奴が立ってるからそれ目印に
来てって言っといた」

倉田「やばい奴で伝わるんじゃない」

恵里菜「やっぱいっすねえ。いや、良い意味で
ですよ！ 良い意味で！」

涼子「やっぱりなあ」

慫然とした表情の倉田、握手の手を

差し出す。

倉田「創龍館・倉田カンフーマインドフルネス

研究所の倉田です」

涼子「うわあ。やっぱ」

恵里菜「やっぱ」

笑う涼子と倉田。

倉田「あのなあ……」

和美「確かにやばいわ」

傷だらけの和美が雨の中に佇んでいる。

そして、三人に微笑みかける。

× × ×

(フラッシュ)

コンテナ場の監視カメラに写る恵里菜。

× × ×

だが、恵里菜を見て笑みが消える。

○建設中のビル(夜・雨)

工事用ライトを一灯つける和美。

和美「楽にしてくれ。ウチのグループの所有

地だから。こんな所じゃ楽にもできないか」

雨宿りしていた猫が和美に向かって

鳴く。

猫に微笑んで床に座り込む和美。

和美「でも悪い人間に追われた野良猫にとっ

ては安全な場所だ」

和美、恵里菜を見る。

居心地悪そうにしている涼子たち。

恵里菜「カズヨシさんだったんですね……」

カズミかと思ってた……」

和美「よく間違われるよ」

涼子「いや、いやそんなことよりさ！ あの、

全然急すぎてついていけないよこっち！

なに!?! 仮面の殺人鬼とか、人身売買の半グレ組織とか……なに!?!」

倉田「世の中には悪い連中もいるものさ」

涼子「お前が一番事情知らねえだろ」

倉田「なら、黙るとしよう」

涼子、恵里菜に向かって、

涼子「なに? 仕事ってそういうこと?」

殺人鬼の手伝いしてたの? それ普通に

犯罪じゃないの?」

恵里菜「はい」

涼子「ええ……」

体育座りして顔を埋める恵里菜。

涼子「なんで立ち向かわないのさ。糞野郎の

言いなりになったりして人生台無しにする

ことないじゃん。自分で自分の首絞めてる

じゃん」

和美「怖いからさ。怖いんだ。俺にはよくわかるよ」

恵里菜「違います」

顔を上げる恵里菜。

恵里菜「私には分かったんです。ホラー映画が

好きだったから。殺人鬼がどんな行動を

取るか、どうしたら殺人鬼から逃れられる

か、分かっていたんです」

涼子「なら尚更じゃんか」

恵里菜「(涼子を見て)どう思います? 自分

だけチートコード使うみたいにして。みんな

なは殺されたのに一人だけ生き残って。

卑怯だなんて思いませんか?」

涼子「全然思わない。全然わかんない」

沈黙。和美、上の空で独り言のように

話し出す。

和美「ピンって呼んでるんだ。臓器売買用に

拉致したやつ。ピン6検品、タレ3出荷。

タレは生きてたまま売る用の女。そんな連絡

を毎日してる。そのうち何も感じなくなっ

たよ」

涼子「なんだよ。うわもう、こんなつもりで

東京来たんじゃないのにさあ。東京超怖え

じゃん」

苦笑する涼子。

涼子「なあ倉田。カンフーマスター。テメエ強いんならなんとかできねえのかよ。その殺人鬼も、半グレの連中もやっつけろよ。こいつら解放しろ。(和美を指して)いや、こっちは別にいいや。でも(恵里菜を指して)こっちはや……」

目をつむったまま立ち上がる倉田。

倉田「悪いが、関わり合いになりたくないね」

涼子「じゃ取引。裁判でテメエの味方してやる。

だからテメエも味方しろ」

倉田「裁判を闘うために犯罪に加担するの

かい？ ご冗談を」

立ち去ろうとする倉田の前に涼子が

立ちはだかる。

涼子「だったら倒してから行け。このあいだの

再戦だ」

恵里菜「涼子さん」

涼子「いいから！」

倉田の前でカンフーの構えを取る涼子。

倉田「やめないか。遊びに付き合ってる暇は

ないんだよ」

涼子「なに怖じ気づいたの？ やっぱテメエに

実力なんかなかったんだなあ」

倉田、やれやれという表情で涼子に

高速左フックをかます。吹っ飛ぶ涼子。

倉田、冷たく涼子を見下ろす。

涼子、起き上がって再び構えを取る。

フットワーク軽くジャブやフックを

繰り出す。すべて倉田にかわされる。

カウンターで倉田の回し蹴りを食らい、

涼子は再び倒れる。

和美「あんた、殺人鬼がどうやって生活してるか不思議に思ったことはありませんか。

売るんですよ、被害者の個人情報。ウチだっ

買ってる。使い道は色々あるからね。パスポ

ートとか、偽装結婚とか、振り込め詐欺と

か。結局、殺人鬼も自分の好きないように

生きているようで単なる使い捨ての「マ

なんだ。知恵の回る連中に体よく使われる

だけの汚れ役だ」

倉田「ほお、面白い話だ。まるで私じゃないか」

起き上がる涼子。置かれた角材を手に倉田に襲いかかると、倉田も角材を手に取って防御。反対に角材で涼子の胸部を突く。

吹っ飛ぶ涼子。今度は起き上がれず、震える手を宙に伸ばし、その手をバタンと降ろす。

角材を放り捨て、服の乱れを直す倉田。倉田「だが、私は今の境遇に満足しているよ。

コマで結構。じゃあ、お元気で」

倉田、立ち去ろうとして倒れた涼子の横を通り過ぎようとした瞬間、涼子の金的攻撃を食らう。

倉田「ほあああああああー！」

涙を浮かべてうずくまる倉田。

何事もなかったかのようにすくと立ち上がる涼子。

涼子「テメエから学んだことが役に立ったな」

倉田「だからそう言っただろうが！」

○山中の廃病院(夜・雨)

(以下、スマホカメラのPOV)

三人の若者たちがスマホで動画撮影しながら肝試しをしている。

若者1「おーい、島田あ！ あいつマジどこ行った」

若者2「死んじゃったんじゃないの？」

若者1「マジかよ超こえー」

若者2「なんか殺人鬼とかに襲われてさ」

若者3がスマホ撮影者の若者1を背後からおどかす。

短く叫んで振り返る若者1。

笑う若者2と若者3。

若者1「お前マジやめろって！ ビクったあと、笑っていた若者3の腹を突き破ってチエーンソーが出てくる。

若者3が絶命して床に倒れると、その

背後に立っていた翁の面の殺人鬼が
姿を現す。殺人鬼は続けて、突然の事
に腰を抜かした若者2にチエーンソー
を振り下ろす。

動画を撮影しながら逃げる若者1。

(POV、終わり)

逃げていく若者1をボーツと突っ立つ
て眺める殺人鬼。

と、若者1、廊下に張られたピアノ線に
足をひっかけてずっこける。

身体を激しく床に打ちつけて動けなく
なる若者1。物陰からそれを確認した
恵里菜は殺人人に向けてオッケーサイン
を出す……。

× × ×

と、いうのは殺人鬼の願望であった。

現実の若者1は転ぶことなくどこかへ
と逃げていく。

殺人鬼、どこにもぶつけようのない
苛立ちと悲嘆を込めて、闇雲にチエ
ーンソーを振り回す。

○山中の廃病院の外観(夜・雨)

雨を切り裂くようにチエーンソーの音
がこだまする。

倉田N「私が出せばこんなものでは
ないが、いいだろう。そこまで言うなら手を
貸してやる。だが一つだけ条件がある」

○ホームセンター

変装した倉田と涼子、ダンボールやら
木製のイスとテーブルやらジャッキ・
チエーンのカンフー映画にありがちな
小道具を買い集める。

倉田N「私なら素人など何人相手にしても敵
ではないが、モチベーションの問題もある。
モチベーションはカンフーの重要な要素だ。
私が最大限の力を発揮できるよう君たちは
舞台を組め」

○貸し会議室ビルの外観

○貸し会議室ビル・搬入口

警備室に顔を出す和美。半グレ警備員が不思議そうな顔をする。

和美「やあ、どうも」

半グレ警備員「あれ、和美さんじゃないですか。どうしました？」

和美「実は今日の集中セミナーなんだけど、会長の要望でちよつとしたサプライズがあるんだ。その……（殴る仕草）分かるでしょ？」

頷きながらうんざりした表情をする

半グレ警備員。

和美「あなたはいいいじゃない。ここで警備してるんだから。大変なのは出席する

こつちなんだからさ」

半グレ警備員「あ、そっか。そうですね。すいません」

和美「それで、ちよつと色々道具とか使うから、悪いんだけど一旦エントランスに置かして欲しいんだ」

半グレ警備員「あー、ちよつと確認を」

和美「それじゃサプライズにならないだろ。

俺の名前で通せばいいから。会長直々の

話だから、頼むよ」

半グレ警備員「あ、はい、わかりました」

和美「くれぐれも内密にな」

○建設中のビル

作業員たちが仕事中。

その片隅に恵里菜が突っ立っている。

二人の作業員が雑談。

作業員1「なあ、朝からいるあれ、なに」

作業員2「俺が知るか。オーナー命令だから

今日だけ置いとけてよ。ここが一番安全なんだと」

作業員1「それどういう意味？ 座敷童ってこと？」

作業員2「知らんがそれは絶対違う」

○ホームセンター

レジに来てている涼子と倉田と和美。
金を払うのは和美の役目。

レジ係「三十六万八千円になります」

二人を見る和美。

すつとぼける涼子と倉田。

和美「いや払うけども」

○殺人鬼の心象風景

テーブルの上に置かれた四つのお面。

ひよつとこ、若女、翁、般若。

殺人鬼の荒い呼吸が聞こえる。

殺人鬼、般若の面を取る。

○貸し会議室ビル・エントランス

作業員に変装した涼子と倉田が搬入口から次々とカンフー対決用の小道具を運び込む。ダンボールの山。ビールケースの山。木製のイスとテーブルの組が沢山。銅鑼。木人椿。木箱に入った数個のヌンチャク。数個のトンファー。数個の三節棍。そして大量の青竜刀と、洗濯物と物干し竿。

○同・警備室

最初は何気なく搬入作業を眺めていた半グレ警備員、段々と表情が困惑に染まってくる。

涼子N「それで、そっちはいいけど、殺人鬼はどうやっておびき出すわけ」

恵里菜N「そんな必要ないです。あいつは必ず来ます。私にはわかります」

涼子N「はあ」

倉田N「まあ、なんでもいいわ」

和美N「それじゃあ作戦会議と行きましようか。懐かしいな。昔はこんなことよくやってたよ」

○廃病院

般若の面を着けた殺人鬼、チェーンソーを手に立ち上がる。その動作に迷いはない。

○貸し会議室ビルの前

搬入作業を終えた涼子と倉田が路上駐車した軽トラックに戻っていく。和美は二人を見送ってビル内に戻ろうとする。

と、猫の鳴き声。和美が振り向くと猫が立ち止まって和美を見ている。

和美、しゃがんでスマホで猫の写真を撮ろうとするが、猫は逃げていってしまふ。

その後ろ姿を和美はただ眺めている。

○夕陽が沈む

○サウナ・浴場（夜）

目を閉じて水風呂に浸かっている倉田。ただいま精神統一中。

○貸し会議室ビル・エントランス（夜）

本店店長・榊が狩野らを引き連れてエントランスに入ってくる。

榊「おいなんか汚えな。映画でも撮んの」
笑う榊。追従する他の半グレ。

狩野「あ、それいいですね」

榊「やるか今度。なんか、そこらへんの安いアイドルとか使ってな。な？」

○サウナ・浴場（夜）

全裸のまま洗い場でカンフーの所作をとる倉田。

○貸し会議室ビル・大会議室（夜）

半グレが百数十人ほど集まっている。セミナーの様子は会場後方に置かれたカメラで各地の半グレ支店に中継されている。

○オフィスビルの高層階・社長室(夜)
会長・桑原、ノートPCでその光景を
醒めた目で眺めているが、やがてPC
を閉じて部屋を出て行く。

○サウナ・更衣室(夜)
クリーニングした漢服に着替える倉田。

○貸し会議室ビル・大会議室(夜)
司会の半グレ構成員が盛り上げる。
司会「では皆さん、拍手でお迎え下さい。
東京本店の榊店長です」
半グレ構成員たち、万雷の拍手。
榊たちが部屋に入ってくる。

○建設中のビル(夜)
恵里菜と和美、並んで壁際で体育座り
をしている。
和美「人を、自分の手で殺したことは」
間。
恵里菜「一度もないです」
和美「なら、そのままできてくれ。良いこと
をしたって生まれて初めて思える」

○貸し会議室ビル・大会議室(夜)
壇上へ上げられた末端半グレ構成員
が他の参加者たちの罵詈雑言を受けて
泣いている。

半グレの野次1「仕事が遅い！」
半グレの野次2「話し方が回りにくい！」
半グレたちを煽る榊。

榊「テメエら舐めてんのかこの野郎！ こいつ
が新しい自分に生まれ変わるためには自分
を批判的に見つめ直すための厳しい視点が
必要だろうがあ！ もっと絞り出せばカ
野郎！」

半グレの野次3「か、顔が気持ち悪い！」
半グレの野次4「息が臭そう！」
半グレの野次5「とりあえずキモイ！」

○サウナ・休憩室(夜)

求人誌を読んでいる涼子。

そこに倉田がやってきて、座る。

倉田「なにを見ているんだ」

涼子「仕事探してんだよ」

倉田「良いのは見つかったか」

涼子「さあな」

間。

涼子「世の中には色んな仕事がある。(求人

広告を見ながら)これも仕事だし、これも

仕事。これだって仕事だ。でもどれも同じよ

うなもんなんだろうな。偉そうな奴に媚び

て雀の涙の金をもらおう」

倉田「私が求める仕事もそんなところには載

っていないかったよ。フリーのカンフー使い

募集。あるわけがない。しかし構わなかった。

どのみち、金を得るためにこの道に進んだ

わけじゃないからな。カンフーは私を救っ

てくれた。だから私はカンフーで人を救う

ために生きることにした。何を得るかは

問題じゃない。何を与えられるかが問題

なのさ。

前に、水に流すことがカンフーの極意と

言ったな。あれは何もウソじゃない。流れた

水は一点に溜まり、やがて岩をも砕く力に

なるだろう。だから水に流すんだ。いつか

岩を砕けるように」

間。

涼子「コンビニ夜勤にするわ」

倉田「今の話聞いてた？」

○貸し会議室ビル・大会議室(夜)

壇上に立つ榊に向けて半グレ構成員

たちが同じ文句を繰り返し唱和して

いる。

榊「私たちに生きる価値はありません！」

半グレ構成員たち「私たちに生きる価値は

ありません！」

榊「会長に尽くすことが生きる価値です！」

半グレ構成員たち「会長に尽くすことが生きる価値です！」

そこに、恵里菜を引き連れた和美が入ってくる。

その場の全員が二人に注目して、場の空気が固まる。

和美、恵里菜を床に放る。そして榊を睨みながら、息を切らして、

和美「名古屋の……逃げたタレです。あのクソ野郎とこいつはグルだ。エサになりますよ。店長！ 会長！ こいつが俺の誠意ですよ」

榊「和美、お前……」

と、部屋に入ってきた若女の能面を

着けた人物が、日本刀で背後から和美を切りつける。

傷口から大量の血が噴き出す。

面食らって後じさる榊。

突然のことに固まる半グレ構成員たち。若女、何事もなかったかのように部屋を出て行く。

榊「おおい！ テメエコラアアア！」

半グレ構成員たち「おおい！ テメエコラアア！」

榊「唱和はいいからさっさと殺せ馬鹿野郎

おおおお！」

半グレ構成員たち、若女の人物の後を追って外に出て行く。

榊と狩野はその場に残る。

恵里菜は床に倒れて震えている。

○同・エントランス(夜)

半グレ構成員たちが階段からエレベーターからどつと流れ込んでくる。

そこに若女の人物の姿はなく、入口ドアの前に目をつむり。腕組みをし、仁王立ちした倉田が待ち構えている。

物陰に隠れていた涼子、若女の仮面を外して一呼吸つきながら、倉田の様子を窺っている。

警戒しながら倉田に近づいていく半グ

レ構成員たち。その一人が先陣を切つてナイフを手に倉田に迫る。

ナイフの半グレ「おい、おっさんおっさん。ちよつと邪魔なんだけどさ、一瞬でいいから死んでくれないすか」

倉田、素早い一撃をナイフの半グレに食らわす。

倉田「あだああああああ！」

エントランスに響き渡る倉田の怪鳥音。ナイフの半グレの手からナイフが落ち、後を追うように本人も床に沈む。

半グレ構成員の先頭「なんだお前」

倉田、静かに漢服の上着を脱ぎ捨てる。

倉田「ドント・シンク……ファイール！」

倉田、絶叫しながら半グレ構成員の集団に突っ込んでいく。

怯えながら応戦する半グレ構成員たち。だが倉田のカンフーに歯が立たない。不自然に置かれた木製のイスとテーブルのセットやダンボールの山、洗濯棒と洗濯物、木箱に入った三節混などを活用して倉田は半グレ構成員たちを床に沈めていく。

武器になるものを探していた半グレ構成員たちの目に木箱に入った青竜刀が飛び込んでくる。半グレ構成員たちは一様にそれを手に倉田に襲いかかる。銅鑼が倉田の目に入る。

○同・警備室(夜)

半グレ警備員、監視モニターに映る

エントランスの乱闘を眺めている。

慌てて誰かに電話連絡しようとする、鉦が半グレ警備員の喉を掻き切って、モニターが血に染まる。

その背後にいるのは般若の面を着けた本物の殺人鬼。

○同・大会議室(夜)

ボディガード役の半グレ構成員に守ら

れながら部屋を出て行く榊。

狩野は微動だにせずと和美の死体を見つめている。

榊「狩野！ お前、お前とりあえずその女、

見てろ。な。会長に……会長の判断仰ぐま
で何もするなよ。な」

狩野「わかりました」

○同・エントランス(夜)

銅鑼のバチを手に応戦する倉田。その
バチ捌きに青竜刀の半グレ構成員たち
はやはり次々と床に沈んでいく。その
一人が銅鑼に激突してごうんと間抜け
な音。

バチが折れると今度はトンファーで
闘う倉田。もう闘える半グレ構成員も
少なく、エントランスは死屍累々。

やがて、一人の武術家風の半グレ構
成員がヌンチャクを手に倉田の前に立ち
はだかり、構える。

倉田もトンファーを捨ててヌンチャク
を手に取り、構える。

真剣な空気。

半グレ構成員、雄叫びを上げながら
ヌンチャクを振り回し、自分の額に
ぶつけて倒れる。

倉田「いや使わせろよ！」

と、建物全体の照明が落ちる。

○同・廊下(夜)

非常口に向かっていた榊たち、突然の
ことに立ち止まって天井を見上げる。

○同・大会議室(夜)

倒れたままの恵里菜がつぶやく。

恵里菜「来た」

○同・エントランス(夜)

咄嗟に上階に向かって走り出す涼子。

倉田、それを目に留め、

倉田「おい！ どこに行く！」
涼子「デメエはそこで雑魚どもの始末でも
してろ！」

倉田「なんちゅう扱いだ！ 私は師父だぞ！」
半グレの一人が這いずって倉田の足を
掴もうとする。
その手を踏みつける倉田。
倉田「あたあ！」

○同・大会議室(夜)

停電に動じずじっと和美の死体を見つ
めている狩野。くんくんと臭いを嗅い
でいる。

それから恵里菜に近づくと、物のよう
に蹴飛ばす。

狩野「和美さん、芝居ですよね？ このタレ
殺しますよ。起きてくれませんか」

むっくり起き上がる和美。その血は
血糊であった。

振り返って和美を見る狩野。

狩野「俺たちが嗅いできた血の臭いって、
こんなじゃないですもんね。それとも
偉くなって忘れちゃいました？ 現場に
流れる血の臭い。もう偉くもないか」

狩野をにらみつける和美。

○同・廊下(夜)

壁の向こうからチエーンソアのエンジ
ンをかける音が聞こえる。

榊「なんだ？」

と、チエーンソーを持った殺人鬼が
会議室の壁を突き破って、榊たちに
襲いかかる。

切り裂かれる榊の側近たち。榊、慌て
て非常口とは反対方向に逃げ出す。

○同・警備室(夜)

半グレ警備員の死体を見ている倉田。
倉田「おでましか」

○同・大会議室(夜)

狩野と殴り合っている和美。
だが手負いということもあって全く
敵わず、一方的にいたがらわれている。

狩野「和美さん変わりましたね。前はこんな
ヘタしてなかったのに」

和美「転職しようと思つてさ。人を殴ったり
騙したりしないで済むような仕事」

狩野のアップパーがモロに入って、和美
の口から血が噴き出す。

狩野「これは本物の血の臭いだ」

恵里菜「ホラー映画で殺人鬼に殺される奴の
特徴。仲間割れをする」

狩野、呆れたような表情で、部屋の隅
に逃げていた恵里菜を見る。
模造刀を持った涼子が部屋に入って
くる。

○同・エントランス(夜)

階段を駆け下りてきた榊、息を切らし
て入口の自動ドアに駆け寄るが、停電
のためドアは開かず激突する。

背後からチェンソーの音。

目を見開く榊。恐る恐る振り返ると、
そこには殺人鬼がいる。

榊「欲しいも——」

榊が何か言う前に、殺人鬼は榊を真っ
二つに切り裂く。

榊の死体を見下ろす殺人鬼。

倉田の声「やれやれ、武器も持たない相手に。
だが、私が手を汚さずに済んでよかったよ。
手を汚す価値もない奴だ。君にはお似合い
だろう」

殺人鬼が声に振り返ると、そこに倉田
が立っている。

カンフーの構えを取る倉田。

倉田「創龍館・倉田カンフーマインドフルネス
研究所、倉田一郎」

殺人鬼は何も言わずに倉田を眺め、
不思議そうにゆっくり首をかしげる。

倉田、不敵な笑みを浮かべる。

○同・大会議室(夜)

涼子と狩野が闘っている。

涼子の模造刀が狩野の腕にヒットして、狩野はよろめく。

狩野「模造刀か」

すかさず追撃する涼子。だが狩野は模造刀を片手で振り払うともう片手で涼子の喉を掴み、宙に吊り上げる。

○同・イントランス(夜)

殺人鬼の大振りのチェーンソー攻撃をかわし、倉田は着実に殺人鬼の足や腕をヌンチャクで攻撃していく。

膝への一撃が効いて、殺人鬼、膝を突く。その隙に倉田は一気に突進攻撃を仕掛ける。

倉田「あだあああー!」

素早く立ち上がってチェーンソーを振り上げる殺人鬼。

一瞬、時が止ったようになる。そして、倉田の右腕がヌンチャクごと床に落ちる。

互いに向き直る二人。

倉田、左手で切断面を押える。

だがその眼差しは殺人鬼を捉えて離さない。

○同・大会議室(夜)

狩野、涼子のマスクを片手で外す。

狩野「お前誰だよ」

苦しそうに狩野を見る涼子。と、狩野の首に大きな結束バンドが静かに、素早く巻き付く。

恵里菜、慣れた手つきで一気に結束バンドを締め上げると、狩野は涼子を掴んだ手を離して、呼吸ができずに闇雲に動き回る。

その様を冷たく眺める恵里菜。

恵里菜「だから言ったのに」

涼子、恐怖を帯びた目で恵里菜を見る。

○同・エントランス(夜)

倉田「あたああああああ！」

倉田「あたああああああ！」

倉田、飛び蹴り！

○同・大会議室(夜)

和美、ポケットから折りたたみナイフを取り出して、狩野に突進してその腹に突き刺す。

倒れる狩野。やがて、動かなくなる。

和美「何言っただよお前。お前は殺しなんてやらないでいいよ。人の仕事を奪うんじゃないねえ」

静まりかえる室内。

どこからかパトカーのサイレンが聞こえてくる。

○同・エントランス(夜)

涼子、恵里菜、和美が上階から降りてくると、倒れた殺人鬼と倉田が目に入る。

倉田に駆け寄る涼子。その傷だらけの身体を見て、

涼子「うゝわ、汚ったね」

倉田はまだ辛うじて息があるが、腕の出血が酷く、もう長くない。

倉田「もつと他に言うことがあるだろ……」

殺人鬼が呻き、もがく。

咄嗟に振り返って殺人鬼を見る涼子。倉田「心配するな、まともに動けやしないうさ。

両手両足をやってるからな。困るだろう、そいつに死なれちゃあ。あの女が犯罪に巻き込まれた事実が立証できなくなる」

倉田の言うとおおり、殺人鬼はもがくばかりで、その場から動けない。

涼子「やるじゃん。良い負け方だよ」

倉田、ニヤリと笑う。

倉田「カンフーはどう負けるかが重要だからな」

倉田、息を引き取る。

恵里菜、殺人鬼に歩み寄る。

殺人鬼と恵里菜、見つめ合う。

○(回想)キャンプ場の森の中(夜)

若い男Aが絶命して、その背後に血まみれのチェーンソーを手にした般若の面の殺人鬼が現われる。

二人、しばし見つめ合って、それから

殺人鬼は片手を恵里菜に差し伸べる。

○貸し会議室ビル・エントランス(夜)

恵里菜、殺人鬼から般若の面を剥ぐ。

現われた素顔はどこにでもいそうな

平凡な青年の顔。

外がガヤガヤと騒がしい。何台もの

パトカーが止って警官が外に出てくる。

恵里菜、殺人鬼を見限って外に向かう。

涼子「行くの？」

恵里菜「いつか行かなきゃと思ってたから。

またいつか会おうね」

涼子に微笑む恵里菜。

和美、自動ドアを手で開けて道を作る。

恵里菜、その道を『ドラゴン怒りの

鉄拳』のラストシーンのように堂々た

る足取りで歩んで、和美も後に続く。

外に出て行く二人を、自分の無力を

噛みしめながら涼子は見送る。

○東京都心の風景

T：数ヶ月後

○コンビニ(夜)

店員の涼子がやる気なさそうに週刊誌の返品をしている。

経済誌の表紙に郷田、桑原、溝口大臣の笑顔の写真が載っているのが目に入る。その特集名はへロング鼎談・トップ

ランナーの日本改造論」。

涼子「ありがとあしたー」

店長「あのう、山岸さん」

気弱そうな店長がバイトの原を連れてくる。以前、倉田の新人研修セミナーに参加し会社を訴えた、あの男。

涼子「なんすか」

店長「彼、今日から入ったから、色々教えてあげて下さい。よろしくお願いします……」

幽霊のように去って行く店長。

原「原です。よろしくおねがいます」

じっと原を睨んでいる涼子。

原「な、なんでしょうか……」

涼子「思い出したー。あの原くんか」

原「え、どつかで……会いましたっけ？」

涼子「ટેમેე新人研修でセミナー受けて会社
パワハラで訴えただろ。創龍館・倉田カンフー
ーマインドフルネス研究所。(自分の胸を叩いて)門下生だよ。その場に居た」

原「あー、あの時の。あー……」

涼子「なんでટેમેეここにいんだよ。(雑誌を取って、郷田の写真を指し)こいつの会社
潰すんじゃないかったのかよ」

原「潰すってそんな……」

涼子「どうした裁判は」

原「そんなの無いですよ」

涼子「示談？」

原「そんなもの無いです」

涼子「なんでだよ」

原「自分が間違ってたことがわかったんですよ。
人権派の弁護士に丸め込まれただけです。
冷静に考えて勝てるわけじゃないじゃないです
か。相手を誰だと思ってるんですか」

涼子「なんでだよ」

原「いや、なんでそんな当たり強いんすか」

涼子「なんでだよ！」

沈黙。原、頭を下げる。

原「す、すいません」

涼子「お前はあのセミナーで師父から何を
教わった」

原「えーっと……水に流せとか……」
涼子「その話には続きがある。水に流せ。流れた水は一点に溜まり、やがて岩をも砕く力になるだろう。いいのかよ、テメエこのままで。もう充分流れたんじゃねえのか」
悔しさに目を潤ませる原。

○一流ホテルのエントランス前(夜)

赤いジャージ姿でヌンチャクを手にした涼子とTシャツにジーンズ姿の原がホテルを見上げている。

原「なんすかその格好」

涼子「モチベーションだよ。モチベーションがカンフーのキモだからな」

○同・祝賀パーティ会場(夜)

郷田、桑原、溝口大臣の三人が鏡開きを行っている。

千人規模の参列者が拍手を送り、何台ものマスコミのカメラが壇上の三人を捉える。

屈強なボディガードたちがインカムで何か連絡している。

○東京地裁

殺人鬼の裁判が行われており、恵里菜は証人として出廷している。

○刑務所・作業場

真面目に刑務作業に没頭している和美。

○一流ホテルのエントランス前(夜)

涼子「行くぞ」

原「はい」

ホテルに向かっていく涼子と原。

その足取りは死地に赴く戦士の決意と覚悟を感じさせる。

(了)